

U-40 部会 presents リレーエッセイ ～私たちの体外循環史～

答えは、きっとすぐそばにある

日本体外循環技術医学会 U-40 部会 工藤寛子

はじめまして。U-40 部会員を拝命しております、大阪大学医学部附属病院 臨床工学部の工藤寛子と申します。このたび、三重ハートセンターの柿本様よりご指名を賜り、恐縮ながら筆を取らせていただくこととなりました。

気がつけば、体外循環業務に携わるようになって 10 年が経ちました。年月の流れは本当にあっという間で、近年では教育に携わる機会も増え、日々試行錯誤を重ねながら業務に取り組んでいます。

当院は非常に規模の大きな施設であり、体外循環に限らず、さまざまな分野の業務を担うことが求められます。こうした多岐にわたる業務に携わる中で、指導者に恵まれたこともあり、当初は「自分には難しすぎて務まらないのでは」と感じていた体外循環業務に、次第に強く惹かれていきました。その時期はその奥深さに魅了され、「できれば体外循環だけに専念したい」とさえ思うようになったほどです。

しかし、今振り返ると、透析患者様の体外循環には透析業務の知識が活かされ、循環器疾患の病態や血行動態の理解には、心臓カテーテル室で培った経験が活かされていると感じます。補助循環を担うには集中治療や呼吸管理の理解が不可欠であるように、体外循環という一つの専門業務は、それ単体で完結するものではないという現実気づかされました。加えて、体外循環を真に成立させるためには、周辺領域への理解、多職種との連携、そして患者様の背景を汲み取る視点が欠かせません。こうした“当たり前”の重要性に気づけたのは、各分野の業務を通じて、さまざまな立場の医療スタッフや患者様との関わりの中で、自分の視野を少しずつ広げてこられたからこそ実感できたのだと感じています。

さらに、そうした経験を重ねる中で視野をより広げる大きなきっかけとなったのが、大変ありがたいことに、昨年より参加させていただいている U-40 ならびにジェンダー共同参画部会の皆様との出会いです。他施設で活躍されている同世代・同性の皆様とのつながりは、私にとって非常に大きな刺激となり、大阪大学しか知らなかった自分が、いかに限られた視点で体外循環を捉えていたかを痛感する機会にもなりました。こうした学びや気づきが、私の視野をさらに広げてくれています。

Perfusionist として体外循環に専念できる環境は、確かに理想的とも言えるかもしれませんが。しかし現実には、当院のように多岐にわたる業務を担う職場も少なくありません。若手の頃は、症例経験を思うように積めず、もどかしさや焦りを感じることもありましたが、多領域で得た知識や視点、そして学会を通じて出会えた皆様との関わりを通して、少しずつ「患者様にとっての最善」を考える力を養ってこられたと実感しています。

最後になりましたが、私は広い視野と柔軟な思考を持ち続けながら、患者様にとって“最良の体外循環”を提供するだけでなく、それを発信していける Perfusionist でありたいと考えております。このリレーエッセイを通じて、読んでくださった皆様と価値観を共有し、今後の臨床や対話の中で、ささやかでも学び合い、支え合えるようなつながりを生むきっかけとなれば幸いです。